

CRNを取り巻く学会の動向

■ 日本子ども学会

<http://www.crn.or.jp/KODOMOGAKU>

第4回子ども学会

テーマ：「子ども・進化・脳科学」

生命の科学と子ども学

大会推進委員長：安藤寿康先生（慶應義塾大学）

期日：2007年9月15日、16日

場所：慶應義塾大学三田キャンパス

初日……………

基調講演1は長谷川真理子先生（総合研究大学院大学）による「進化から見たヒトの子どものユニークさ」。続けて榎原洋一先生（お茶の水女子大学）、佐倉統先生（東京大学）、安藤寿康先生らが長谷川真理子先生とともに、「ダーウィン先生を囲んで」というテーマで座談会を行いました。さらにシンポジウム1「進化の中の子ども」では、中村徳子先生（昭和女子大学）、デビット・スプレイグ先生（農業環境技術研究所）らが比較行動学的な視点から霊長類とヒトとの違いについて発表しました。



2日目……………

基調講演2は小泉英明先生（日立製作所役員待遇フェロー）による「脳科学から見た子どもの教育」。シンポジウム2「危機と共に生きる子どものための科学」では、北澤茂先生（順天堂大学）、神山潤先生（東京北社会保険病院）、長谷川奉延先生（慶應義塾大学）らが子どもたちの成育環境をめぐる問題点について討議を行いました。また、高橋孝雄先生（慶應義塾大学）が「遺伝と環境によって育まれる子どもの脳」について、安藤寿康先生が「ふたごが明かす脳と行動の形成過程」について講演を行いました。

日本子ども学会も日本赤ちゃん学会も、学際的に子どもの発達や成育環境について探求する学会です。全体を統合する基礎学問が設定されているわけではありませんが、現在は脳神経科学、遺伝学、進化生物学、霊長類学、ロボット工学など、生物学系や認知科学系の学問が、多様な学問分野をつなぐ役割を果たしています。従来人間科学には、文化的・社会的視点が欠けると言われましたが、現代の人間科学は精神的な営みも含めて総合的にヒトの独自性の解明にあたっています。今後もそのような子ども研究の流れはますます

■ 日本赤ちゃん学会

<http://www.crn.or.jp/LABO/BABY>

第7回学術集会

テーマ：「赤ちゃん研究は赤ちゃんに何を返せるか」

大会長：志村洋子先生（埼玉大学）

期日：2007年6月30日、7月1日

場所：大宮ソニックシティ（埼玉県さいたま市）

初日……………

シンポジウム1では、林 安紀子先生（東京学芸大学）がオーガナイザーとなり、「初期の言語・コミュニケーション発達をうながすもの—対乳児ことば、音楽—」というテーマで馬塚れい子先生（理化学研究所）、武居渡先生（金沢大学）、二藤宏美先生（ヤマハ音楽研究所）らが、乳幼児のコミュニケーション活動などについて論じました。また、教育講演として、松沢哲郎先生（京都大学霊長類研究所）が「チンパンジー研究からヒト赤ちゃん研究へ」というタイトルで発表を行いました。

シンポジウム2では、根ヶ山 光一先生（早稲田大学）がオーガナイザーとなり、「脳研究は赤ちゃんに何をもたらすか」というテーマで、多賀巖太郎先生（東京大学）、鈴木健太郎先生（札幌学院大学）、近藤清美先生（北海道医療大学）、小山敦司先生（赤ちゃん和妈妈社）らが討議を行いました。

2日目……………

シンポジウム3「赤ちゃんが乳児保育に求めているもの」では、榎原洋一先生（お茶の水女子大学）、松永静子先生（新井保育園）の二人がオーガナイザーとなり、汐見稔幸先生（白梅学園大学）、大日向雅美先生（恵泉女学園大学）、雲雀信子先生（NPO法人子育てサポート・チャオ代表）らが保育の現状について議論しました。

そのほか、日本赤ちゃん学会は、カナダ・トロント大学のサンドラ・トレハブ先生（Sandra Trehub）フロリダ州立大学のジェーン・スタンレー先生（Jayne Standley）を招いて、「赤ちゃんと言語」をテーマに、「赤ちゃん学国際シンポジウム」「公開シンポジウム」などを開催しています。

加速していくと思われます。

その一方で、子どもというのは研究対象というよりも、私たち大人とともに生きて、未来の社会を形作るパートナーであります。子どもたちの日常をどのように支援していくのか、子どもの基礎研究とともに、成育環境の向上につながる活動の必要性への自覚も高まっています。基礎的な子ども研究と成育環境の支援、その両輪のもとに今後の両学会の活動は展開されていくと思われます。

※CRNは両学会HPの運営をサポートしています。